

ノーモア・ヒバクシャ通信 第16号

発行 2014年4月25日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
ブログ
<http://tks-forum2011.blog.ocn.ne.jp/hibakusha/>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町15プラザエフ6F

TEL/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

★もくじ

I. 第3回理事会、臨時理事会のご報告	P 1
II. 3. 29『被爆者調査を読む』学習会のご報告	P 2
III. 第2回通常総会のご案内	P 7
IV. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク第2回打ち合わせのご案内	P 7
V. 継承の取り組みのご紹介 (第6回) コープあいち被爆者の声を聞き取る会『2013年度まとめの会』	P 8
VI. 2014年度会費納入のお願い	P 9

I. 第3回理事会、臨時理事会のご報告

1. 第3回理事会のご報告

今回は、報告事項の冒頭に「原爆の反人間性」を被爆者の証言によって告発する映像作品の試作を上映し、意見交換しました。引き続き、さまざまな短い作品の制作を追求し、「核兵器廃絶」の国内外の世論喚起に活かしていくことを確認しました。また、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター」の基本構想を具現化するために、継承センター設立委員会の設置も確認しました。

3月15日(土)に東京の島嶼会館(とうしょかいかん)で開催された第3回理事会の報告事項及び審議事項は、次の通りです。

(報告事項)

- ① 12. 14「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」の報告
- ② 12. 23「東京大空襲・戦災資料センターの訪問と懇談」の報告
- ③「原爆の反人間性レポート」の進捗状況について
- ④「会の紹介パンフレット」の進捗状況について

(審議事項)

- ① 2013年度事業報告(案)及び決算(案)の件

- ② 2014年度事業計画（案）及び予算（案）の件
- ③ 役員選任の件
- ④ 継承センター設立委員会の設置について
- ⑤ その他

2. 臨時理事会のご報告

総会議案及び総会の運営が主な審議事項でしたが、事業報告の一環として、原爆の反人間性を告発した映像作品「原爆は 人間として死ぬことも生きることもゆるさなかった」（シリーズその1）を上映することを確認しました。また、この会の活動や事業の進捗状況が総会の出席者に理解できるよう運営に留意すべきことが強調されました。また、会員の皆さんが参加し相互に交流できる双方向の広報体制のあり方についても提起がありました。来る9月に韓国で開催される第8回国際平和博物館会議へ参加し、この会の活動を報告することも確認しました。会議の冒頭に、HPなど「Web情報発信体制」について改善方針を説明しました。

4月19日（土）に東京四谷主婦会館プラザエフで開催された臨時理事会の報告事項及び審議事項は、次の通りです。

（報告条項）

- ① ホームページのリニューアル等について
- ② 『被爆者調査を読む』学習会のご報告
- ③ 第8回国際平和博物館会議への参加について

（審議事項）

- 1. 総会議案について
 - (1) 2013年度事業報告（案）承認の件
 - (2) 2013年度決算（案）承認の件
 - (3) 役員選任の件
 - (4) 2014年度事業計画及び予算の件
- 2. 総会の運営について
- 3. その他

II. 3. 29 『被爆者調査を読む』学習会のご報告

昨年の3月、慶應義塾大学出版会より『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承—』（浜日出夫・有末賢・竹村英樹編）が刊行されました。これは、「(故) 中鉢正美原爆関係資料」の発見をきっかけに、これまでに行われてきた被爆者調査を読み解いた、複数

世代にまたがる研究者らの共同研究の成果です。

〈原爆は人間にとって何をしたのか〉を明らかにするために、もっとも意識的に取り組んできたのが、専門家たち（被爆者や市民の協力を含む）による被爆者調査だったと言えるでしょう。これらの調査資料は、継承する会のアーカイブの第一級資料として貴重であるだけでなく、調査にとりくんだ人たちの被爆者や被爆者問題へのアプローチや問題のとらえ方から、いま、私たちが学べることは少なくありません。

そこで、継承する会では3月29日、『被爆者調査を読む』と題した学習会を開きました。この本から2つの章を選んで企画した学習会には、会場（東京・豊島区「エポック10」）いっぱい32人が参加。本の執筆陣をはじめ、被爆者、学生・大学院生、ジャーナリスト、一般市民ら多彩な顔ぶれが、〈調査資料〉と〈継承〉をキーワードに学びあう、今後の継承活動への希望と示唆に富んだ場となりました。

■ 報告1：中鉢正美「被爆者生活史調査」の継承について考える

——なにをどのように継承するか——

報告者：竹村 英樹さん（慶應義塾大学教職課程センター准教授）

この出版の発端となった中鉢正美氏（当時慶應義塾大学教授、1920～2013）は、隅谷三喜男氏（同東京大学教授）、石田忠氏（同一橋大学教授）とともに、厚生省が戦後初めて実施した「昭和40年度原子爆弾被爆者実態調査」に参画した社会学者の一人です。この調査に個別の事例調査を組み込ませ、広島を担当しただけでなく、厚生省が発表した調査結果への批判を経て、昭和50年の実態調査においても事例調査（広島・47世帯）を実施されました。

竹村さんは、中鉢資料を読み解きながらその調査・分析の過程を詳細に紹介されました。

広島各階層にわたる被爆者156世帯の生活史を詳細に聞き取り、原爆による世帯（家族）の破壊と再編を社会階層に着目しながら分析した66年調査の手法は、10年後の75年には、高度成長によって階層差が見えなくなるなど時代の変化による限界につきあたりました。75年事例調査は、同じような被爆状況であっても、被爆で喪った家族が誰であるか（世帯主・男の長子欠損の有無）によりその後の暮らし向き（転落か再編か）が決まってくる「典型例」を報告するにとどまりました。その成果とみるべき論文「広島のある町、その被爆三〇年」は、同じ商店街における群像を生活史作品としてまとめる志向をもちながら、個人情報の問題や当時の社会科学の制約もあって、今なお発表には至っていません。

時間や場所を明記した調査アルバムは、綿密に整理された調査原票や未発表の原稿とともに、調査プロセスや視点を知る貴重な資料です。また、大学院生らとの継続的な研究会を重ねながら、1977年のNGOシンポジウムや原爆被害の全体像研究会など人的なつながりを広げ、被爆問題に密接にかかわっていかれた中鉢先生の軌跡は、一人の誠実な経済・社

会学者、教育者の模索と発展のあとを示すものとして、私たちがそこから学べることも少なくありません。

竹村さんは、「研究者が資料をどう扱い、それをどう後世に継承するのか」「(センターの基本構想に書かれているように)証言は読み込み、分析されて、はじめてその意味をとらえることができる。被爆者調査、研究も同じだと思った」と語りました。著作権の問題などクリアすべき課題もありますが、今は広島大学平和教育研究センターに移管された「中鉢資料」の活用がのぞまれるところです。

■ 報告2：継承すべき人びとの表現活動とその変遷

——社会科学者による被爆者調査と高校生が描く原爆の絵——

報告者：小倉 康嗣さん（立教大学社会学部准教授）

曾祖父とおじを原爆で喪い、入市被爆した祖母と母に手を引かれて5歳のときに広島原爆資料館に行き、ショックで眠れぬ日が続いたという自らの体験から語りだした小倉さんは、非被爆者が切実感をもって継承していくうえで、こうしたしんどい思い、精神的な苦しきをもっと肯定的にとらえてよいのではないか。それを伝えたくてこの章を書いた、と言います。

被爆者調査においては、たんなる方法を越えたところでの自らの立ち位置＝ポジショナリティがするどく問われてきました。社会科学者として、被爆体験にどんな立場からどのように関わり、いかに表現していくか。社会調査史は、その格闘の歴史であり、社会科学者としてそこから学べることは少なくありません。

そうした視点からこれまでに行われてきた様々な被爆者調査を読み解いてきた（論文の前半）小倉さんは、この日は主に、被爆者が高齢化によって少なくなっているなかで、非体験者が《切実感をともなった自分の問題として、いかに受け止めていけるのか》。その一例としての、広島基町高校の創造表現コースにおける高校生が描く原爆の絵の実践例（論文の後半）を、映像を交えながら紹介されました。

被爆者の体験とライフヒストリーを半年かけて何度も聞いた高校生が、その一場面を絵に描く。実際に描いた高校生は、苦しみ、悩みながら「描く」という行為＝体験をとおして、「自分も体験しているような気持ち」になる。また、「原爆は怖い」だけで終わらせるのではなく、「自分のなかで受け止められた」という感覚が生起した。「そのまま伝えることだけが継承じゃない…。証言者の方の思いと、自分たちの思いをどんどん重ねていったら、証言者以上のその重さが、どんどんどんどん増していくと思う」と語っています。

証言した被爆者は、「ここですごいこと継承しとるんですよ。悩んで悩んで悩んで描くわけですから。…私の人生いうのを、こんななかでかなり話していますからね。…ただ絵ができたいうだけじゃなくって、この子たちにはしっかり伝えたなあという気はあります」。「(写真ではなく)絵がいい。絵いうのは自分が一筆一筆描くんですから、その描くあい

だに人間の魂が入る…、思いが入ってくると思いますから」といい、語り部のときに、高校生に描いたもらった絵を用いているといいます。

東照宮に逃げていったとき、傷ついたたくさんの人たちを「人だと思ってみてなかったから、あまり描くと嘘になる」という話を聞いて、「亡くなったかもしれない人を、勝手に描いたらいけないんだなあって思っているんだ」と思い、「絵だったら、その人の本当に見たものを残せる」と語った高校生の絵。焼けただれたわが子を抱いた母親の姿を描くために、自分の母親にモデルになってもらったという高校生の絵。その一枚一枚には、被爆者の苦しみと思いに彼女らの思いが重ねられ、当事者が描いた絵とはまた異なる迫真力、切実感がうかがわれます。

小倉さんには、この本を読んだ広島資料館の「伝承者」養成第一期生のある方から、手紙が寄せられたといいます。それまでの「調査」（社会学者の格闘）と私たちの「伝承」（伝承者になれるのか、悩み苦しんでいる自分）の接点を探しながら読みすすめ、励まされたという内容は、継承センター基本構想にうたった「継承すべき人びと（社会学者も高校生も）の表現活動とその変遷を、遺産として記録する」ことの意味を、あらためて実感させてくれました。

■ 参加者一人ひとりの感想、意見が述べられました。（以下は抜粋）

・調査ということばは、（世論調査など）一般的には冷たい響きがあるが、被爆者調査をする人の姿勢には、命がけでやっているという感じがしていた。被爆者調査のものすごさ、命がけでする方々の思いの重さにはすごいものがあると思った。

・中鉢先生の社会階層的な分析は、政策的にどう生かされたのか。特別措置法は、結局、医療と健康面に注目したもので、生活への対策はほとんどなされなかった。被爆者は10年間放置されたが、こうした手法は福島に生かせるのだろうか。

・中鉢先生は、この調査は政策的動向とあまり関係なく行われたと総括している。厚生省がお金を出し、先行した調査の結果もふまえて行われたが、3人の社会学者がそろって本体調査への批判に声をあげたのが事実だ。（竹村さん）

・学問的な枠組みと政策との関係性は時代によって変わるのではないか。生活構造の枠組み自体が高度成長期まではみられるが、それ以降崩れてしまう。福島の場合は世帯員がバラバラになり、家庭構造が見えなくなっている。（有末さん）

・昨年のオスロ会議で、原子雲の下で起きたことを知るには、被爆者の証言や描いた絵を見ることに尽きると発言したが、絵を描く人がいなくなると思っていた。今日の話を知り

て、こうして描いてもらえば継承できると希望をもった。

・話を聞くだけでは感想文で終わってしまう。いろいろ考えて、本人が受け止めて描いてもらう。自分の問題として継承する意味が大きい。

・高校生の描く絵については、毎年メディアで発表はされるが、被爆者がどんな思いで話したか、高校生がどんな思いで描いたかについては、ほとんど聞かれていないし、共有もされていない。みんなの問題として共有する作業が一番大事だと思う。(小倉さん)

・被爆体験を話してきたが、話す3日前くらいから落ち込む。相手の団体にもよるが、いろんな注文が出る。何のために、どこに目的があって話しているのか、今もって心の中に継承というのがストーンと入ってこない。批判的なモヤモヤがつよかったが、きょうはそれでもかなりわかり、今日でだいぶ変わった。

最後に、この本の編著者である浜日出夫先生（慶應義塾大学文学部教授）がこうしめくくってくださいました。

学習会のテキストにこの本をとりあげていただき、ありがたかった。我々の書くものはたいていどこにも届かず消えていくが、40年、50年前の研究者たちの残した仕事を我々が拾い上げ、読み直したことで、これがまたどこかに届くのか、まったく期待はしていなかったが、この学習会でやっぱり届くんだ、届いたんだと実感をもつことができた。継承とは「届く」ということなのだろう。必ずしも狙ったところへではないが、石が跳ねて行って、どこかに届く。思わぬ人が拾い上げてくれる、という希望をもった。

終了後の懇親会にも18名が参加。親しく語り合い、今後の協働への可能性を感じさせる楽しいひとときを過ごしました。

報告者のお二人にも、このような学習の機会を喜んでいただくことができました。

「中鉢先生の研究史を丁寧にたどってみていえることは、被爆者調査にかかわって中鉢先生は変わられたということです。ご用意いただいた被団協新聞記事(第8号、1979.8.6、特別座談会＝被爆者援護はどうあるべきか)の発言には、未公開エッセー「被爆文化—死者による生者へのゆるし—」(1979、援護法制定を思想的に位置づけた論稿)と同じ方向性が見られます。これが79年であることを考えると、79年は中鉢先生の展開点になる(べき)年であったのだと思いました。…こうした学習会はいいいものですね。」(竹村さん)

「被爆者の方々はじめ、長きにわたって身を挺して原爆と対峙してこられた方々に、自分の報告を聞いていただけただけでもありがたく光栄なことでしたのに、昨日はおひとりおひとりから、深くあたたかいコメントをいただき、本当に感激でした。とくに、最後にふりしぼるようにコメントして下さった「今日でだいぶ変わりました」というメッセージには、強く励まされました。…「研究者をやっていてよかったな」「がんばろう」という原点の気持ちが湧き出てきて自分のなかに積み重なっていく、そんな幸せな一日でし

た。」(小倉さん)

Ⅲ. 第2回通常総会のご案内

この間、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター」の基本構想を確認し、その設立のための条件整備をめざしています。また、被爆者の皆さんとともに、ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐ取り組みをすすめ、「原爆の反人間性」を告発する映像作品を制作し内外への発信も強めようとしております。2013年度の取り組みを振り返り、2014年度事業計画を共有するため、下記の要領で第2回通常総会を開催します。

詳細は、別紙「特定非営利活動法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 第2回通常総会のご案内」をご覧ください。

記

1. 日 時 2014年5月17日(土) 午後1時～4時

1. 場 所 東京四谷主婦会館プラザエフ 5階会議室

1. 議 題

(審議事項)

第1号議案 2013年度事業報告(案)承認の件

第2号議案 2013年度決算(案)承認の件

第3号議案 役員選任の件

(報告事項)

1. 2014年度事業計画 2. 2014年度予算

正会員のみなさまへ

同封ハガキの出欠通知(欠席の場合は委任状)をお送りください。

賛助会員のみなさまへ

ご出席いただく場合はFAXで(合わせて懇親会の出欠も)お知らせください。

Ⅳ. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク第2回打ち合わせのご案内

昨年12月の“ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい”では、

(1) それぞれの地域、身近なところで被爆者の証言に耳を傾け、語り合う場をつくること

(2) 被爆者の証言、受け継ぎ手の思いを記録に残し、それぞれの地域から発信していくこと。

(3) ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワークに参加してください。また、それぞれの地域で取り組みを結ぶゆるやかなネットワークをつくること
が呼びかけられました。

この間、コープあいち被爆者の声を聞き取る会は 3月22日(土)、せいきょうコープ本店で2013年度まとめと学習の会を開催し18名が参加、5名の方からの聞き取りの記録が紹介されました。

千葉県原爆被爆者の被爆体験聞き取り活動実行委員会は、各ブロックで記録した聞き取り票をまとめ、4月22日の第4回実行委員会でこの間の取り組みの共有化と振り返り、実行委員会での冊子作成に向けた編集委員会の立ち上げの確認などを行いました。

5月9日には生協労連が平和推進委員会で聞き取りを行います。

以下の日程で、『ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク 第2回打ち合わせ』を開催いたします。

このネットワークはグループ、個人どなたでも参加できる、各地の取り組みを結ぶゆるやかなネットワークです。地域での取り組み、語る側、受け継ぐ側の思いを結ぶために、多くみなさまのご参加をお待ちしております。

また各地の取り組みもご紹介したいと思います。みなさまの取り組みのご報告もお寄せください。

(日時) 2014年5月24日(土) 14:00~16:00

(場所) 主婦会館プラザエフ5F会議室

(内容)

- ・各地の取り組みの交流、
- ・12月の「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」について
- ・NPT再検討会議へ向けて

V. 継承の取り組みのご紹介 (第6回)

コープあいち被爆者の声を聞き取る会『2013年度まとめの会』

3月22日(土)、せいきょうコープ本店3階にて、コープあいち被爆者の声を聞き取る会の2013年度まとめと学習の会を開催し18名が参加しました。

学習会では、木戸季市氏(日本被団協事務局次長・岐朋会事務局長)から、「被爆者運動とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承活動」と題してお話いただきました。木戸さんは、被爆者の70年は遺棄された10年とたたかひの60年であり、そのたたかひは「自らを救うとともに、人類の危機を救う」ものであること、戦争の被害を「すべての国民がひとし

く受忍しなければならない」とした基本懇意見に対して、原爆被害に国の償いを求めることは、国民の命を守る課題であり、人類を救う課題であること、そのためにも、原爆被害を明らかにし、被爆者のたたかひの歴史を聞き取っていく重要性を、豊富な資料を使いながらお話をいただきました。お忙しい中講師をお引き受けくださった木戸さんに感謝しております。

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の会事務局の島村雅人さんが個人として参加し、高校時代からの原爆体験の聞き取りを報告していただきました。「聞き取りを重ね、お互いの意見交換をしていくなかで、語り手の意識が変わり、聞き手の意識も変わってくる」という言葉が印象的でした。

コープあいち被爆者の声を聞き取る会は、昨年8月に発足し、愛友会（愛知県原水爆被災者の会）のご協力をいただいて、原爆体験の聞き取りを続けています。お話を聞かせていただくたびに、被爆者の皆さんのご自分の体験を語りたい・伝えていきたいという思いを強く感じてきました。また、ご自分の体験だけでなく「もっと多くの被爆者の話を聞いてほしい」と依頼されることもあります。そんな被爆者の皆さんの思いに充分に応えていける活動になっていないのですが、このまとめと学習の会に聞き取りを続けてきている愛友会名古屋支部の被爆者の皆さんが5名参加してくださったことは大きな励みとなりました。

久しぶりに参加してくれた聞き取る会会員がそれぞれ、近況や被爆体験継承への思いを話してくれました。後片付けも率先して手伝ってくれたり、終了後の反省会（お茶会）にまとめの会には参加できなかった会員が、「まだ残ってると思って」と差し入れを持って来てくれたりと、改めて、聞き取る会に入会してくださったひとたちの会への協力の思いを知ることができました。

試行錯誤しながらの半年間の活動は不十分で反省することが多いのですが、互いに本を貸しあって勉強をしたり、意見交換をしてすすめてきました。なにより、お話を聞かせてくださった被爆者の皆さんに背中を押されて活動を続けています。このまとめと学習の会を節目として聞き取る会の活動を一層ひろげていきたいと考えています。

VI. 2014年度会費納入のお願い

会費の振込用紙を同封させていただきました。すでにお納めいただいているみなさまには振込用紙は入っておりません。ご送金と前後した場合はお許してください。

領収証が必要な方はご連絡下さい。領収証をお送りいたします。

よろしくお願ひいたします。